



＊第41回＊

石原安野

千葉大

冒険に惹かれるひと

私は女性であり、かつ物理学の研究をなりわいとしている者である。確かに日本ではまだ少ない。そんな私だが自分で『私って理系だなー』と思ったことはない。それどころか子どもの頃は、私は文系の人間なのだと思い込んでいた。なぜか。小学校に上がる前から今に至るまで本を読むことが大好きだからである。田舎の小学生には読書好き＝文系程度のイメージしかなかった。

中高生となると、そのような読書好きのまま行動範囲が広がり、旅に出るようになった。夏休み、冬休みなどの長期休みにはバイトをし、その資金を元手に青春18きっぷで北海道や九州まで足を延ばす。鈍行列車の旅では首都圏からは片道だけで2、3日かかる。もちろん10冊ほどの本をかかえてのんびり旅だ。本の世界に没頭して顔を上げると見知らぬ風景が広がっている。その心持ち。ただし、一つでも乗り遅れれば数時間の待ちが生じる。乗り換えは間違えられない。旅先では今もつながるたくさんの人々や価値観に出会った。

小学生の頃に最初の冒険へとさそったのはコロボックル物語シリーズ(佐藤さとる)や十五少年漂流記(ジュール・ヴェルヌ)だ。

コロボックル物語では子供のころ大切にしていた秘密の場所に大人になって再び訪れるところから物語が転がっ



南極出張！ 検出器の建設に行きます。

ていく。子供時代に大事な場所に出会うこと、そしてなによりも、大人になっても子供の頃に感じた気持ちを失わないことが大事なのだと思いこまれた。大切な場所というのは他人から見れば何の変哲もない場所だ。そこで一人で空想をしたり、本を読んだり時間を過ごすうちに特別な場所となる。一人である時間を持たないと手には入れられない。

中高生の頃は、ちょっとピンボケ(ロバート・キャバ)、アーネスト・ヘミングウェイにマーク・トウェイン、ムツゴロウの青春記シリーズ(畑正憲)、本を読めばまさに心が、何でも見てやろう(小田実)とせっつくのである。無人島に偶然流れ着くのはあきらめるとしても、これらの本の中に広がっている風景は、自分の行動により、現実と重なる広がりを見せる。今考えれば

少々無茶な行動も。

そしてこの頃、私は物理学とも出会った。ニュートンがリンゴの落下をみて惑星の動きにまで思いを馳せたのならそれは大冒険である。そんなことができるのか、時代も時代であったろうにと今でも信じられない気持ちである。リンゴの木の話は伝説とされているが、彼の冒険は物理学を志す者への最初の道しるべとして今も教科書に載っており、その後の道のりを照らす。しかも私もその冒険譚に連なれるのだ。シンプルな落下の方程式から、天体の動きを予想し、光速ほど早く走れば私の時間は止まってしまうなどという無茶な冒険のお供もさせてもらえる。これほど心躍ることはない。問題は道しるべが途絶えた先の冒険を、いかに一人、切り拓くか。

大学院はアメリカのテキサス大学

†千葉大学 グローバルプロミネント研究基幹
"On the Look-out for Adventure" by Aya Ishihara
(Institute for Global Prominent Research, Chiba University, Chiba)





ベルギーへ子連れ出張

子供には7カ月の時から年に一度は海外出張に付き合ってもらっています。



現在千葉大学で開発中の新しい南極氷河埋設型光検出器（“D-Egg”）とともに

オースティン校に進学。ロングアイランドのブルックヘブン国立研究所で博士号研究をし、ウィスコンシン大学でポストドクとなった。その後は千葉大学でも長らく任期付きの研究者として、宇宙ニュートリノの研究を続けてきた。任期なしの職を得たのはほんの数年前である。一人の読書好きの子供が、進む道としては変わっているかもしれない。ただ、私は冒険にでる準備だけは、できていた。

冒険に出る人の共通点とは何だろうか。一言で表せば『向こう見ず』だろうか。冒険に求めるのは、予想もしなかった出来事との出会い、しかも自分の価値観を覆されるような出会い、だ。なんでも予想できてしまう人には出られない旅。

物理学の研究は冒険だということに喩にしか聞こえないだろうか。私にはそれが本当だと、実感を伴って感じられる。私のように冒険ができないと耐えられない人には向いているのだ、とさえ勝手に思っている。研究の先の見え

なさ、誰も行ったことのない場所に到達する不安。冒険ができない人には耐えられないのではなかろうか。私は冒険のない生活に耐えられそうにない。この先研究以外の仕事が増えて、先の見通せる生活となっていくらどうなってしまうのだろうか。実体を伴った冒険にでるしかないか。

大学時代に出会い今もよく読み返す本は、ジェームズ・ヘリオットの「Dr. ヘリオット」シリーズ、ロバート・フルガムの「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」、「気がついた時には、火のついたベッドに寝ていた」、パブロ・カザルス喜びと悲しみ（アルパート・E. カーン編）。

気づくのは、これらの本に出てくる人々は、日常の中に冒険を見出すことができるということ。私が今後目指すべき方向か。年齢ではない。そして、物事を感じる感性がないと無知で向こう見ずではいられないのだと教えてくれる。

そしてなにより、私が目指すべきは若者が冒険に出たいという強い気持ちを持つようにするということ。研究室にはコロボックル物語を読んだことのない学生や、研究者が入ってくる。私は内心のけぞっているんだ。怖がらなくてもいい。無知で向こう見ずは冒険に出る時には財宝だ。しかし本の中の冒険は、自分が目指すべき冒険を見つける手がかりをくれるはずだ。

私の今の生活での最大の冒険は子供の成長である。毎日が初めてであり、価値観の変換をせまる出来事の連続。人間一人の成長がもたらす驚きは物理の研究にもまさる。

宇宙ニュートリノの研究は私にとってはまごうことなき大なる冒険。きっと一人ひとりを待っているさまざまな冒険がある。冒険に出よう。向こう見ずになって、価値観をゆすぶられよう。この欲求に、女子も男子も、理系も文系もない！（2018年7月31日受付）